

目的 第2報は浦知市の学童衣生活の調査を行う。浦知市は表面を関東ローム層が覆う大宮台地の南部にある。東は緩瀬川低地に、西は荒川低地に面し、市域の6割は台地、残りは低地となる。江戸時代、宿場町として栄えた浦知宿と、周辺農村を併せて現在の浦知市がある。農業は台地で米、甘藷などを産し、低地は水田となっていたが、屢々水害を蒙った。こうした地域に次第に都市化が迫り、関東大震災、第二次世界大戦と二度の大波を受けて大きく変貌する。このような背景の中での衣生活の変遷を調べる。

方法 学割発布当初よりの古い歴史を持つ小学校8校を対象とした。

- 各校の百年史をもとに、着衣、髪型、履物、帽子、学用品入れ、等を調べる。
- 卒業写真、クラス写真などにより、和服から洋服への移行状況、通学袴着用期、髪型の変化、着帽状況(学帽)等を調べる。
- 教育史、市史、其の他文献調査。

結果

- 和服から洋服への移行は意外に緩慢であり、完全な洋服化は戦後に行わねばならない。
- 明治・大正期における農家のくらしは概して貧しく、特に度重なる水害をうけた低地帯では困窮した。当然ながら、子供達の衣生活に影響を及ぼしたと思われる。
- 雨の日や雪の日には、殆ど全員がけだして通学するという想像もできなかつた事案があった。
- ある時期、流行と思える特徴ある髪型が見られた。